

# Thou と You

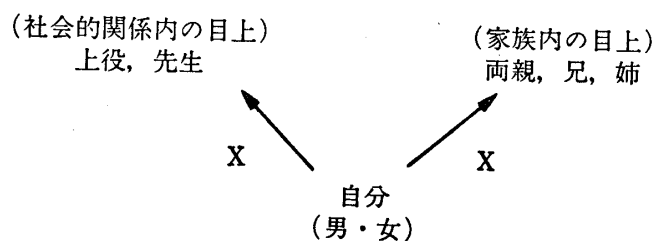
小林典子

語の意味が徐々に変化していくことは、言語の普遍的な特徴の一つである。意味変化には様々な現象が見られるが、その一つに *degeneration* がある。つまり、語の意味する内容が価値の上で、上から下へ下降する現象である。ここでは、この現象を二人称代名詞単数形について、日本語の場合と比較しながら考察してみたい。

現在、英語の二人称代名詞単数形の標準形としては *you* が唯一のものである。古い単数形の *thou* は、祈禱文における神への呼びかけや聖書の中に残されているが、日常生活では使われることはない。この *you* は、第一に、話し手からあらゆる相手に対して使用される。つまり、相手の年齢、社会的立場、男女の別、感情等に全く無関係に使われている。言い換えれば、*you* が使えない人間関係は存在しない、ということである。第二に、しかるべき位置に存在すべき *you* を省略して、表現しないで済みますということは、命令文又はごくくだけた会話体以外にはない、ということが言える。つまり、*you* は話し手に対してその相手をさすという以外の情報は何も伝えないが、しかるべき位置にかならず置かれる、一種の抽象的記号であると考えられるであろう。

これに対して、現在の日本語の場合はどうであろうか。日本語の二人称代名詞単数形の標準形は「あなた」である。<sup>(1)</sup> 一般には、「あなた」以外に、「きみ」、「おまえ」も使われ、「きさま」は卑称である。しかし、話し手が相手をさす場合に、いつでもこれらの代名詞が使われているとは限らない。その範囲が、話し手と相手との間の様々な関係によって、限定されているわけである。社会的関係や家族関係の中で、目上か目下か対等であるかという点と、男女の別という点を考慮して、例えば、成人男女を発話者とした場合、次のような三つのパターンにまとめることができるであろう。

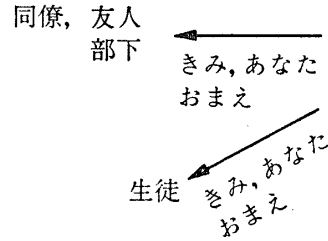
1)



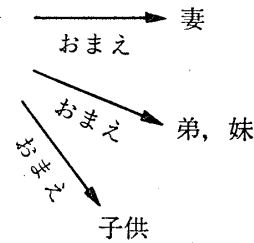
1)の場合、目上のものに対する二人称代名詞は存在しないと言えるであろう。

2)

(社会的関係内の対等又は目下)

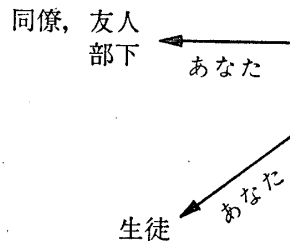


(家族内の対等又は目下)

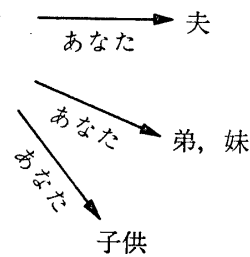


3)

(社会的関係内の対等又は目下)



(家族内の対等又は目下)



これらを you の用法と比べると、第一に、それぞれの代名詞の使用範囲が限定されている。言い換えれば、代名詞それ自体に相互の人間関係を示す能力があるということ、第二に、使用可能な場合でも、実際には使わずに済ましてしまったり、他の範疇の言葉を使うことが多いことが、異なる点であろう。

次に、これら日本語の代名詞の歴史的背景を、主に『国語大辞典』(小学館)によって概観してみたい。

「あなた」(彼方・貴方)は、二人称代名詞としては、江戸時代、宝暦(1751—64)頃から用例が見られ、対等又は上位者に用いた。現在では、対等又は下位のものに用いる。

「きみ」(君、公)は敬愛の意をもって相手をさし、上代では女性が男性に対して用いる場合が多いが、男同志、女同志の間で用いた例もあり、中古以後は男女ともに用いた。現在では、対等又は目下の相手をさす男性語である。

「おまえ」(御前)は、江戸時代前期までは敬意の強い語として上位者に用いた。明和、安永(1764—81)頃には上位又は対等者に、さらに文化、文政(1804—30)頃になると、対等又は下位者に対して用いられるようになり、今日に至っている。

「きさま」(貴様)は、もとは尊称の代名詞であったが、江戸時代後期以降は対等又はそれ

以下のものに対して用い、今日では親しい同輩か目下のものをさすこともあるが、卑称として用いられる。

以上に共通していることは、待遇性の水準低下、**degeneration** が見られることである。代名詞として使用されるようになった最初の段階では、すべて目上又は対等のものに対して敬意を表わしたが、やがて対等又は目下のものへと対象の価値が下がったもので、現在目上のものに対する代名詞が無いのはこのような結果なのである。

待遇性の変化に関して、英語の場合はどうであろうか。まず **thou** と **you** の歴史的変遷を概観すると、次のようにまとめることができる。<sup>(2)</sup>

	Old English (OE)		Middle English (ME)		Modern English (ModE)	
	sing.	pl.	sing.	pl.	sing.	pl.
Nominative	þū	gē	þow thow	ge ye	thou	ye you
Genitive	þin	ēow	þin þi thin thy	eower  your(e)	thy  thine	your
Accusative Dative	þē	ēower	þe the	eow yow you	thee	you

OE の **þū** は、インド・ヨーロッパ語族に属する他の言語と共通の源を持ち、ラテン語では **tu** であり、同じゲルマン語派の OE より古い段階の言語であるゴート語では **pu** である。ラテン語の [t] 音がゲルマン語で [θ] 音に推移していることは、**Grimm's Law** によって明らかである。<sup>(3)</sup> つまり **thou** は、<sup>(4)</sup> インド・ヨーロッパ語族に共通な祖先の段階から現在に至る迄、連綿と存在し続けてきたことになる。複数形 **gē** は、これとは源を異にし、**you two** を表わす両数形 (dual) と共通である。<sup>(5)</sup>

**Thou** は、元は、目上のものに向って用いられ、尊敬の意を表わしたようである。OED の **You** の項に、次のような記述がある。

...Thou, being originally used in token of respect in addressing a superior, but later also to an equal, and ultimately generally:

**Thou** のこの目上のものに対する敬称としての用法は、OE より前の段階に相違なく、OE ではすでに一般にあらゆる相手に対して用いられている。従って OE では、**thou** と **you** の違いは単複の違い以上のものではなかった。しかし、13世紀後半になると、丁寧な呼びかけとして、**thou** に代って複数形 **you** が用いられ始めたのである。この用法はフランス語の影響によるも

のであるが、ME 末期迄には、両者の間に次のような使い分けがかなり普及することとなったのである。つまり、*thou* は社会的に対等なもの、親しい間柄や目下のもの、又は、子供を対象にし、*you* は目上のものに対する敬意を表現した。この *you* の使用範囲が、目上のものから対等のものへと拡大され、やがて *thou* を駆逐して、上下関係に全くかかわりなく一般に使用されるようになって、今日に至っているわけである。以上のように、*thou* は待遇性が下降することによって、遂には日常の言葉から消滅してしまい、*you* の場合にも、単数形として使用された最初の段階では、上位の対象のみを示したものが、対等から一般へと拡大され、ここにも日本語の場合と同様に、常に *degeneration* の現象が見られるのである。

このように、現在の記号的性格を持つ *you* に到達する迄の *degeneration* の過程の途中には、*thou* と *you* が単に相手をさす以上の意味を持っていた時期があったわけで、William Shakespeare の作品では、両者を使い分けることによって、登場人物相互の関係や感情の動きが巧みに表現されているのである。次に *The Merchant of Venice* によって検討することにする。<sup>(6)</sup>

Act IV, Scene I は有名な法廷の場である。途中から Portia と Nerissa が男装の裁判官とその書記として登場する。この場の登場人物が、お互いにどちらの代名詞を何回使っているかを示したのが表 I である。Thou の中にその屈折形 *thy*, *thine*, *thee* も含め、*you* の中に *your* も含めることにする。

表 I

	characters	thou	you		characters	thou	you
①	Duke → Antonio ←	T	—	⑦	Portia → Bassanio ←		正正正 正 F
②	Duke → Shylock ←	正正 F		⑧	Shylock → Bassanio ←	F 正 —	
③	Duke → Portia ←		正 F —	⑨	Shylock → Gratiano ←		正 — 正正正正 F
④	Duke → Nerissa ←		— 下	⑩	Antonio → Bassanio ←	T	正正正下 T
⑤	Portia → Shylock ←	正正正正 正正	正 F 正 —	⑪	Gratiano → Nerissa ←		—
⑥	Portia → Antonio ←		正正 T —	⑫	Gratiano → Bassanio ←	—	

合計 196

①②③④で、Duke に対しては、*your grace* という敬称も含めて、すべてのものが *you* であるのは当然で、Duke から Antonio, Shylock に対しては目下のものに対する *thou* であるが、Portia と Nerissa に *you* を用いるのは、裁判官とその書記に対して敬意を表わしているわけ

である。⑤の Portia と Shylock の間には興味深い現象が見られる。Portia から Shylock に対しては当然 *thou* になるはずであるが、*you* も使われているのは、身分の上下とは無関係に、正式な法廷での一人の原告に対する態度があらわれているのであろう。Shylock から Portia に対しては、身分関係から当然 *you* であるべきであるが、三ヶ所で四回 *thou* 形が使われていることに注目したい。

O wise young judge, how I do honour *thee*! (221)

How much more elder art *thou* than *thy* looks! (248)

We trifle time, I pray *thee* pursue sentence. (295)

これらの場面では、Portia が法律をまげる訳にはいかないと、Shylock の主張を認める発言をしたのに対し、Shylock は唯一の自分の身方が現われたとばかりに歓喜している。いかに親愛の情を感じているかが明らかである。しかし、Portia からの、慈悲の心を持って意志をまげるようにという説得に対する応答は、心をかたくなにして *you* であって、同一の人間関係であっても、二つを使い分けることによって、感情の動きを巧みにとらえているのである。⑥⑦では、お互いに社会的に対等に近い関係と考えられるのであろう。⑧⑨の関係では、お互いに *thou* で、特に Bassanio は Shylock に対し強い憎悪感を持ち、*thou* *unfeeling* man (63) と呼びかけ、Gratiano も *be thou* damned, *inexorable* dog (129) と憎しみを表わしている。⑩での Antonio は友人の Bassanio に対し、緊張したこの場で冷静であるが、Bassanio は自分の為に命を落とそうとしている友人に対して、時に感極まっている。⑪では Gratiano が Nerissa を本物の書記と信じ、⑫では、親しい友人の間柄を示している。以上の観察から、*thou* の用法をまとめると、

- 1) 目上のものが目下のものに対する時、
- 2) 相手に親愛の情を持っている時、
- 3) 相手に憎悪や軽蔑の気持を持っている時、

のようになるであろう。

次に、この部分の現代日本語訳と比較検討することにする。<sup>7)</sup> 原文に現われる二人称代名詞の合計は 196 回であった。これに対し日本語訳は、4 種類 47 回のみである。具体的に示すと表 II のようになる。表中の番号は表 I に対応し、表中の空欄及び欠番の項は、代名詞の使用が皆無である。

明らかに目上のものに向って用いられているのは、⑤の Shylock から Portia に対する「あなた様」一回で、他はすべて対等又は目下のものにむけて発せられる場合のみである。①②⑤⑥から、Duke と Portia から目下のものにむかっては一貫して「お前」であるが、原文では *you* も *thou* もある。⑧⑨で、「きさま」は Bassanio と Gratiano から Shylock に憎しみをこめ

表II

①	Duke → Antonio ←	thou …お前 一	⑦	Bassanio → Portia ←	you …あなた 一
		you …お前 一			you …あなた 下
②	Duke → Shylock ←	thou …お前 下	⑧	Bassanio → Shylock ←	thou …きさま 一
					thou …お前さん 丁
⑤	Portia → Shylock ←	you …お前 正 一	⑨	Grasiano → Shylock ←	thou …きさま 正
		thou …お前 正 正			thou …お前さん 一
		you …あなた様 一			
⑥	Portia → Antonio ←	you …お前 下	⑩	Bassanio → Antonio ←	thou …きみ 丁
					you …きみ 一

合計 47

て発せられ、これに対して Shylock は軽蔑的に「お前さん」と応じ、丁度 thou の用法に対応する。⑩の Bassanio と Antonio の間の thou と you は一貫して「きみ」と訳され、⑦の you は「あなた」となっている。

このように、日本語訳で使用されているのは、「あなた」(「あなた様」)、「きみ」、「お前」、(「お前さん」)、「きさま」であり、それぞれの人間関係や心情によって使い分けがなされているのであるが、thou, you の用法と比較して、その種類の違いもあって、完全に一致する訳はないが、いくつかの類似点が見い出されるのである。しかし、原文に比べて、使用度数が非常に少ないことは表 I, II から明らかである。

以上の考察から次のように結論することができるであろう。

- 現在の二人称代名詞単数形 you は、単に記号的な役割しか持っていないが、意味の degeneration によって、thou から you へと移行していった長い歴史の途中には、これら二つの代名詞が、人間相互の関係のみならず、心理的推移をも表現しうる大きな表現能力を備えていたわけで、日本語の代名詞の用法に類似した面を持つ時期があったと言えるであろう。
- しかし、英語の代名詞は、どの時代にも、あらゆる人間関係について、しかるべき位置に必ず用いられるのに対し、現在の日本語の場合には、同じ degeneration の結果によるのであるが、上位者に対する代名詞を失ってしまっているというように、欠落した部分、つまり使用不可能な人間関係があるのみならず、可能であっても実際には表現しないで済ませるか、他の範疇の語を用いることが多い点は、両言語の大きな相違である。

#### Notes

- 『国語大辞典』(小学館)収録の国語審議会建議である敬語に関する基本方針によると、相手をさす言葉は「あなた」を標準形とし、「きみ」は親しい間柄だけの用法とし、「おまえ」もしだいに「あなた」を使うようにしたい、とある。
- OE, ME については、方言、時期による違いや、綴り字の不確立の為に、それぞれの屈折形は単一ではなく、いくつかの異形態があるが、代表的な形のみをあげてある。

- (3) e. g. L. *trēs*—Gothic *þreis*—OE *þri* (=three)
- (4) 以後, OE, ME 形, 及び, Genitive, Accusative, Dative の屈折形を代表して単に *thou* と示す。  
*you* についても同様。
- (5) OE に存在した両数形は, 1200年過ぎ迄は使用されたが, その後消失した為, 前記の表からは省いてある。
- (6) William Shakespeare, *The Merchant of Venice* (London: Cambridge Univ. Press, 1962), p. 63–p. 78.
- (7) 福田恆存訳『ヴェニスの商人』(新潮社)による。

### Bibliography

- Abbott, E. A. *A Shakespearian Grammar*. London: Macmillan and Co., 1929.
- Baugh, A. C. *A History of the English Language*. London: Routledge & Kegan Paul, 1968.
- Brook, G. L. *Words in Everyday Life*. London: The Macmillan Press, 1981.
- Murray, J. A. H., et al. *The Oxford English Dictionary*. Oxford: Clarendon Press, 1933.
- Schmidt, A. *Shakespeare Lexicon and Quotation Dictionary*. Third ed. revised and enlarged by Gregor Sarrazin, New York: Dover Publications, 1971.
- Shakespeare, W. *The Merchant of Venice*. London: Cambridge Univ. Press, 1962. 福田恆存訳『ヴェニスの商人』東京: 新潮社,
- 北原保雄他, 『日本文法辞典』東京: 有精堂, 1983.
- 中尾俊夫, 『英語学大系9・英語史II』東京: 大修館, 1972.
- 尚学図書編, 『国語大辞典』東京: 小学館, 1982
- 鈴木孝夫, 『ことばと文化』東京: 岩波書店, 1978.